

第29回

# ATP賞 2012

## テレビグランプリ

社団法人 全日本テレビ番組製作社連盟

発行/社ATP 〒107-0052 東京都港区赤坂7-10-6 赤坂今野ビル4F TEL.03(3582)8520 FAX.03(3582)8063

作り手が選ぶ作り手のための賞『ATP賞テレビグランプリ2012』のグランプリ発表と受賞式典が12月12日、都市センターホテル(千代田区平河町)で開催されました。式典の冒頭、森田高総務大臣政務官、松本正之NHK会長、井上弘民放連会長、迫本淳一コ・フェスタ実行副委員長よりご祝辞を頂戴したあと、倉内均ATP理事長が開会宣言。西堀裕美(NHK)、加藤シルビア(TBS)両アナウンサー司会のもと華やかに進行しました。今年度応募総数は過去最多の148本となり、栄えあるグランプリに輝いたのは、情報・バラエティ部門最優秀賞の『世界の果てまでイッテQ!〜マッターホルン登頂スペシャル〜』(コール、日企、極東テレビ台、ジッピー・プロダクション、アクロ/日本テレビ)。会員社と審査員が投じた101票のうち49票を獲得いたしました。また会場には例年を上回る約600人の関係者にご来場いただき、盛況に式典を終えることができました。ご参加いただきました関係者の皆様には感謝申し上げます。



加藤シルビア(TBSテレビ) アナウンサー 西堀裕美(NHK) アナウンサー

## グランプリ 「世界の果てまでイッテQ!」 〜マッターホルン登頂スペシャル〜

### ●出演者

内村光良 松嶋尚美 手越祐也  
ベッキー 宮川大輔  
森三中(村上知子・大島美幸・黒沢かずこ)  
イモトアヤコ 出川哲朗 デヴィ夫人  
小林可夢偉

ナレーター：立木文彦



### ●スタッフ

チーフプロデューサー：加藤幸二郎  
企画・演出：古立善之  
ディレクター：石崎史郎 立澤哲也 佐藤稔久 富山歩 武井正弘 長田昌之 相田貴史 河野亮 内田秀実 猪股由太郎 青木章浩 小野寺健 吉村彰人  
プロデューサー：松本京子 岡崎成美 中村昌哉 宇佐見友教 荻原伸之 齋藤匠 伊藤英恵  
AP：円城寺剛 池田供子 中附智貴 竹内加奈子 杉原洋子 奥石将大 吉澤枝里子 AD：鍋田拓朗 佐藤智之 渡辺智 鶴巻昌宏 柏田雄二  
宇佐美昭 四柳有美 小倉卓 南里梨絵 藤野研介 高橋容子 後藤紗矢香 藤巻聖 稲生有香 石田真之介 梅本大介  
構成：そーたに 鮫肌文殊 桜井慎一 藤井靖大 音効：保刈智子(サウンドエッグノック) 梅津承子 TM：山本聡一 美術プロデューサー：高津光一郎  
デザイン：本田恵子 美術：日テレアート CGタイトル：神谷渉 編集：土井敬士(オムニバスジャパン) 阪野秀行 MA：番匠康雄  
編集協力：東京オフラインセンター ロケ技術：NiTro 技術協力：鴛田晴海 ロケCAM：磯野伸吾 海野太郎 河邊則宏 辰野貴史 金光利也  
TK：山沢啓子 制作デスク：難波亜矢 小林祐子 編成：鈴木淳一 編成企画：下田明宏 広報：角田久美子  
ロケ協力：読売旅行 Zermatt Tourism Matterhorn Museum Zermatt Alpin Center 国立登山研修所 海外コーディネーション：ThaiMikasa KMA  
山岳コーディネーション：ウェック・トレック リサーチ：フォーミュレーション フルタイム 翻訳・海外交渉：クリス・テッシュナー  
制作協力：コール/日企/極東テレビ台/ジッピー・プロダクション/アクロ 製作著作：日本テレビ放送網

# グランプリ



「イッテQ! マッターホルン登頂スペシャル」は3年前から始まったイモトアヤコの登山チャレンジ企画の第4弾です。これまでキリマンジャロ、モンブラン、南米最高峰アコンカグアと挑戦しおかげさまで毎回好評をいただく事ができました。それ故、毎年この企画が決まると僕とイモトは「またこの時期が来たか…」とプレッシャーというかマラソンを走る前のような複雑な気持ちになります。

特に今回のマッターホルンは、最も悩まされた山です。標高は4,478mとこれまでの山の中で一番低いのですがフォームがヤバいのです、めちゃくちゃ失っているのです。しかし、登山部の第一の目的は登頂の成功ではありません。伝えたいのは、山を題材にした大自然の素晴らしき山に全力で立ち向かう挑戦心、そして笑いです。

「安全第一」「全力を尽くす」これを合い言葉にマッターホルンに乗り込みました

撮影で最も大変だったのが、カメラを回す事でした。ルートは非常に狭く常に急斜面という状況での撮影となりました。そして、天候。山企画では毎度の事ですが、現地に入ってから大幅にスケジュールを組み直しました。大自然と向き合えば、人間の力や想いは一切通用しません。「Let it Be」です。なすがままです。

しかし、登山ガイドの貫田宗男さんのご尽力によりカメラマンから現地の登山ガイドまで一流が揃い、素人集団のイッテQ!登山部をサポートしてくれました。皆様には深く感謝しております。

企画の顔であるイモトも本当に頑張ってくれました。チームで唯一の女性であり、プレッシャーも相当あったと思います。「登れなくても良い、チームの誰かが登れば良い」と言っても「やっぱり私が登って、私が伝えたい」と一切、弱気な姿は見せませんでした。

演出する上で大切にしているポイントが2つあります。1つは「笑い」です。山と真剣に向き合うイモトの感情を

「世界の果てまでイッテQ!」

ディレクター 石崎 史郎  
(コール)

綴るのはもちろん、どんな過酷な状況でも、笑いには貪欲に撮影しています。もう1つのポイントは、「登山の素人としての目線」です。イモトを含め制作スタッフの全てが山に対して素人です。弱音も吐く時に愚痴も言う。プロではなく素人が登るとどうなるか?この要素も視聴者の方に共感して頂けた大きなポイントだと思っています。

アタック前「明日のイモトは今のイモトと全然違う表情になってるよ」「私も楽しみです」とイモトを送り出しました。マッターホルンという山に全力で挑むことで通常の生活では味わえない葛藤や恐怖心と向き合います。そしてそれをうまわるくらいの大きな感動も生まれます。そんな感情は人生になくても別に困らないのですがチャレンジを終えると、やって良かったと心から思わせてくれます。僕は、登っていませんが…アタック隊を見てるとそう思いました。

この様なチャレンジの機会を与えてくれたイッテQ!に感謝すると共に今後も、見てくれた人が一生忘れられない番組を目指して番組制作に励んで参りたいと思っています。

この度は、素晴らしい賞をいただき本当にありがとうございました。



# 最優秀賞

ドラマ部門

BS朝日ドラマ『王様の家』



ホリプロ/BS朝日

脚本 梶田 正剛 佐藤 久美子 森 ハヤシ  
 プロデューサー 川島 保男 (BS朝日) 岩下 英雅 (BS朝日)  
 井上 竜太 (ホリプロ) 中田 好美 (ホリプロ)  
 ディレクター 伊藤 寿浩 (ファインエンターテイメント)  
 猪原 達三 (BIGMAMA)

プロデューサー 井上 竜太 (ホリプロ)

「王様の家」をご評価いただき心より感謝致します。

審査員の方から「各話に宝石のようなメッセージのある<王様の家>は、ドラマ部門最優秀賞に相応しい作品です」とお言葉を頂き、脚本家、監督たちとオリジナル脚本で作上げた作品でしたので、本当に嬉しく、勇気づけられました。

良質な脚本、演技が織りなすドラマを制作したいと「王様の家」を企画いたしました。形式はワンセットドラマ、脚本家も演技陣もスタッフも逃げ場のない真剣勝負の一時。内容は、震災以降、家族の絆が求められている今、家族愛を正面から描きました。また、原作ものが主流の今のドラマ界に、全10本、オリジナル脚本で描くドラマを投じ、物語創作の面白さをアピールできればと思いました。「王様の家」が賞を頂けたことで、オリジナルドラマを目指す制作者が一人でも多く増えていけば幸いです。ゼロから物語を作ることは、本当にはたのしい作業です。

制作会社の制作者が選ぶATPグランプリは、日々戦っている制作会社の制作陣に夢と希望を与えてくれる賞だと思います。

今後、益々のご発展を祈念しております。

ありがとうございました!



ドキュメンタリー部門

ザ・ノンフィクション 特別版『まりあのニューヨーク』  
 ～死ぬまでに逢いたい人～



パオネットワーク/フジテレビ、BSフジ

プロデューサー 味谷 和哉 (フジテレビ)  
 西村 朗 (フジテレビ)  
 松本 裕子 (パオネットワーク)  
 ディレクター 稲垣 綾子 (パオネットワーク)

ディレクター 稲垣 綾子 (パオネットワーク)

この番組は、一人の女性の強い想いから始まりました。2010年冬、まりあさんは意識が明瞭なまま全身の筋肉が萎縮し呼吸困難に至る「ALS(筋萎縮性側索硬化症)」という原因不明の難病と診断されました。突然現れた「命の終わり」に対し彼女はテレビによる記録を自ら希望し、「つけまつげが付けられるうちにNYにいる元夫に逢いたい」と「死ぬまでにしたいこと」を私たちに語りました。

NY行きを果たし、呼吸困難の苦しみに襲われながらも彼女は撮影を止めませんでした。その理由を尋ねた時、彼女はこう答えました。「この世に産み落としておきたいという欲望。私がいれば証。子どももないし大きな業績も残していない。でも、こんな人がいたんだよって覚えててもらいたい、欲望」「欲望」という言葉を聞いた時、もう、理屈ではないことを思い知らされました。

「今年のクリスマスだめかも」と言っていたのに、彼女は蝉の鳴く季節に逝ってしまいました。オフライン編集の只中でした。まりあさんの親友のお母様と同じくALSと闘った弘子さんもお亡くなりになりました。言葉に表せない状況に、私は陥りました。そのような中番組を支えて下さったのが、編集、構成、プロデューサーらベテランの諸先輩方と、「放送を楽しみに待ってるよ」と言って下さったご遺族とご友人たち。そして、まりあさんの強い想いでした。

審査講評を拝見した時、彼女の想いが通じたと感じ本当に嬉しく思いました。名もなき女性の理屈抜きのドキュメンタリーに栄えある賞をいただき本当にありがとうございます。企画立案者であり主人公のまりあさんに、心からの「おめでとう」を言いたいと思います。



## 審査講評



ATP賞テレビグランプリ2012 審査委員長 石田昌浩  
(厨子王)

### 《審査体制について》

昨年度は、審査委員長を含み9名体制としていた(審査委員長がドラマ部門を兼務)が今年度は、審査委員長1名、審査委員9名の合計10名体制とし、より各部門での専門性と権限を重視した選考体制とした。これからのテレビを見据えて未来につながるような企画性、テーマ性、そしてメッセージ性など、「やっぱりテレビって素晴らしい」を感じられる作品をそれぞれのジャンルの一線で活躍する審査員が意見交換しながら選出する事を旨とした。

### 《審査方法について》

ATP賞テレビグランプリが今後、さらに多くの優秀作品を選出できるよう、完成度や、高尚なテーマばかりではなく、若いクリエイターの挑戦や荒削りでもメッセージがあるものを評価する事を目的とした。

各部門、3名の審査委員が各分科会において、創り手の立場から「やっぱりテレビって素晴らしい」を感じるものを選び、その後、審査委員長と再考して選出した。選考の目安として新しいATP賞テレビグランプリをめざし、今回は具体的な選考基準をいくつか決めた。

ドラマ部門は、①手法など従来の形にこだわらず視聴者の満足を優先しているか? ②原作の有無にこだわらずドラマの中にメッセージを持っているか?など。情報・バラエティ部門は、①とにかく新しい試みか? ②創り手のメッセージを感じるか? ③ナレーション、テロップ、同録に頼らずとも伝わる画を考えているか?など。ドキュメンタリー部門

は、①若い人にも伝わる創りをしているか? ②映像など、新しい試み、工夫をしているか?など。

このような基準を心に留め選出した。結果として、今までのATP賞テレビグランプリ以上に創り手を讃える選考が出来た。

### 《審査総評》

応募総数は、過去最高の148作品。しかし、もっと素晴らしい作品があるはずなのにエントリーしていないが為に評価出来ないのが残念であった。

これはATP賞テレビグランプリへの期待感の薄さと受け取るしか無い。そのため今年から、各部門の最優秀賞、優秀賞に加え奨励賞をもうけ、評価されるチャンスの場を増やした。

ドラマ部門の応募総数は32作品。もちろん力作ぞろいであったが、コスト面で工夫した作品や、原作のあるなしに関わらずメッセージがしっかりしていて、家族愛や人間関係を鮮やかに表現していた作品の多さに驚いた。

ドキュメンタリー部門の応募総数は75作品。戦争を題材にしたもの、震災を題材にしたものが並ぶ中、非常にピンポイントな世界観で観るものを巻き込む若いクリエイターの作品に魅せられた。

情報・バラエティ部門の応募総数は41作品。感動の中に笑いあり、遊びの中にメッセージあり…斬新さと大胆さを失いつつあったこのジャンルに圧巻の企画力と演出力の作品があった。

### 「ATP賞テレビグランプリ2012」審査委員

- ◆審査委員長 石田 昌浩 (厨子王)
- ◇ドラマ部門 井上 竜太 (ホリプロ) 堀 貞雄 (東映企画)
- 佐野 奈緒子 (大映テレビ)
- ◇ドキュメンタリー部門 軽部 淳 (NHKエンタープライズ) 佐野 岳士 (東京ビデオセンター)
- 牧 哲雄 (ドキュメンタリージャパン)
- ◇情報・バラエティ部門 長濱 薫 (日テレアックスオン) 錦 信次 (IVSテレビ制作)
- 八木田 裕子 (いまじん)

(五十音順、敬称略)

## 審査講評

～最優秀賞～ \*記載の順番は、各部門別の応募受付順  
【ドラマ部門】

### ◆BS朝日ドラマ 王様の家

この作品は、BS放送なので制作費の制限等があったと思うが、そこを逆手にとって各話にメッセージを込め「ワンセット 一話完結 一時間ドラマ」をオリジナル脚本で製作したことは素晴らしいと思える。地上波ドラマは、タレントを観ることが主流でメッセージ性が弱く、脚本は二の次になっていることへの警鐘ドラマにしていることが意義深い。ワンセットドラマにするため、制作費、脚本家、俳優陣、スタッフが一体となって熱い思いで制作したことが視聴者に強く伝わったと思う。

【ドキュメンタリー部門】

### ◆ザ・ノンフィクション 特別版 まりあのニューヨーク ～死ぬまでに逢いたい人～

一人の女性ALS患者の壮絶な記録だが、この番組は難病の記録を超えて、憧れ、愛、苦悩を経てひとりの女性が確かにこの世に生きたという濃密な実感、いわば「女の一生」を見たという実感が残る。20年前に別れたアメリカ人の元夫との再会を願い、出会い、別れる一連のシーンが心打たれる。二人が公園で語り合う神の話題。そこには悲しみの中に不思議な解放感がある。この番組をみたら、「まりあ」という女性が必ず見た人の心の中に生き続けるだろう。

【情報・バラエティ部門】

### ◆世界の果てまでイッテQ!

～マッターホルン登頂スペシャル～

「イモトアヤコ」という素材を発見し、ここまで育て、マッターホルンにまで登頂させる。それを無事成し遂げたこと。そのエネルギーに感服。圧倒的な映像を取りながらもバラエティとしての笑いを忘れず、引き戻すバランス感覚。タレントとスタッフとの信頼関係なども伝わってきて感動的。番組ジャンル分けを越えた迫力を持った番組になっていると思う。

～観光庁長官賞～ \*作品は本誌14Pに掲載しております。

### ◆「ハイビジョン特集 につぼん 微笑みの国の物語 ～時代を江戸に巻き戻せば～」

#### ●新設の経緯について

今回(2012年)よりこの賞は設けられました。放送文化として優れたテレビ番組を顕彰してきたATP賞の精神に、「頑張れ!東北」の熱き思いが加味され、更に観光庁の『観光で東北の復興を!』という理念が重なり合い新設されました。長年、「人と風土の出会い」というテーマを、観光や旅を題材にした文化情報番組として、また人間ドラマ、ヒューマンドキュメンタリーとして、丹念に描いてきた放送番組は枚挙にいとまがありません。文化教養番組、情報番組等からと特定せず、ジャンルを越えてエントリー、選考される賞として、長い目で育てていければと期待します。

#### ●審査方法、選考について

第1回目の今回は、3部門にエントリーされた148作品の中から、ドラマ10「つるかめ助産院 ～南の島から～」、情熱大陸「石巻日日新聞」、ETV特集「原発事故に立ち向かうコメ農家」、「明日へのシャッター ～高校生が見つめ続けた石巻～」、ハイビジョン特集「につぼん 微笑みの国の物語 ～時代を江戸に巻き戻せば～」、以上5作品が最終選考に残りました。最後の審査段階で、「原発事故に立ち向かうコメ農家」と「につぼん 微笑みの国の物語」の2作品に絞られ、賞のコンセプトにより近いという判断から、受賞作品が決まりました。明治11年に東北を旅した英国人女性、イザベラ・バードが出会った風土、人々の暮らし、また人と人とが触れ合う心は、東北の歴史が育んできた“人と風土”の魅力を充分に呼び起こしてくれます。番組は丹念にイザベラが辿った道を追いながら、瑞々しい感性と、描写力で、現代人の思いをも込めた観点から、日本人論として番組を構成している秀作です。イザベラが感得した東北人の持つ人間味あふれる力強さ、奥深い魅力は、取りも直さず、現代の東北の人々を勇気づける、何物にも代えがたい東北の力ではないでしょうか。第1回目の受賞作品として、このような番組を選考できたことは、ATP賞の誇りでもあります。



優秀賞・奨励賞の審査講評はATPホームページ[www.atp.or.jp](http://www.atp.or.jp)に掲載しております

# 優秀賞

ドラマ部門

## 『謎解きはディナーのあとで』

共同テレビジョン／フジテレビ

プロデューサー

永井 麗子(共同テレビジョン)  
成河 広明(フジテレビ)  
佐藤 未郷(フジテレビ)

ディレクター

土方 政人(共同テレビジョン)  
石川 淳一(共同テレビジョン)  
村谷 嘉則(共同テレビジョン)



ドラマ部門

## WOWOW 連続ドラマW『下町ロケット』

東阪企画／WOWOW

プロデューサー

青木 泰憲(WOWOW)  
土橋 覚(東阪企画)

ディレクター

鈴木 浩介(ハニーバニー)  
水谷 俊之(フリー)



ドラマ部門

## ドラマ10『つるかめ助産院』

～南の島から～

テレパック／NHK 総合

プロデューサー

菅原 浩(NHK)  
黒沢 淳(テレパック)

ディレクター

佐々木 章光(テレパック)  
古厩 智之(C&Iエンタテインメント)



ドラマ部門

## 東海テレビ連続ドラマ『七人の敵がいる!』

～ママたちのPTA奮闘記～

大映テレビ／東海テレビ放送

原作 加納 朋子

脚本 野依 美幸 田中 ひろみ  
福田 裕子

プロデューサー

松本 圭右(東海テレビ放送)  
佐野 奈緒子(大映テレビ)

監督

中野 昌宏(フリー)  
新村 良二(フリー)  
村松 弘之(フリー)



# 優秀賞

ドキュメンタリー部門

## 『カルテットという名の青春』

～太郎、マドカ、麻理子、大と歩いた1371日～

テレビマンユニオン / BS 朝日

プロデューサー・企画  
大原 れいこ(テレビマンユニオン)

プロデューサー  
有賀 史英(BS朝日)

ディレクター  
浅野 直広(テレビマンユニオン)



ドキュメンタリー部門

## ETV特集『見狼記』

～神獣ニホンオオカミ～

うえいくあつぷらんど、  
NHK エンタープライズ /  
NHK E テレ

プロデューサー  
増田 秀樹(NHK)  
宮田 章(NHKエンタープライズ)  
金尾 礼仁(うえいくあつぷらんど)

ディレクター  
新倉 美帆(うえいくあつぷらんど)



ドキュメンタリー部門

## 『3月11日のマーラー』

NHK エンタープライズ / NHK 総合

プロデューサー  
寺園 慎一(NHKエンタープライズ)  
長野 真一(NHK)

ディレクター  
飯塚 純子(NHKエンタープライズ)



ドキュメンタリー部門

## 戦争証言スペシャル『運命の22日間』

～千島・サハリン(樺太)はこうして占領された～

椿プロ、NHK エデュケーショナル /  
NHK BS プレミアム

プロデューサー  
塩田 純(NHK)  
宮田 興(NHKエデュケーショナル)

ディレクター  
金本 麻理子(椿プロ)



# 優秀賞

ドキュメンタリー部門

## 『巨大戦艦 大和』

～乗組員たちが見つめた生と死～

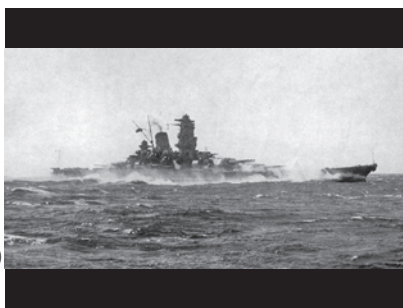
NHK エンタープライズ、かわうそ商会、東京ビデオセンター / NHK BS プレミアム

プロデューサー

伊藤 純 (NHK)  
太田 宏一 (NHK)  
千葉 聡史 (NHKエンタープライズ)  
小林ひろこ (かわうそ商会)

ディレクター

大島 隆之 (NHKエンタープライズ)  
伊東 亜由美 (NHKエンタープライズ)  
正岡 裕之 (かわうそ商会)  
新妻 浩 (東京ビデオセンター)



ドキュメンタリー部門

## 『豚の音がえし』

～BEGINが結ぶ沖縄とハワイの絆～

NHKグローバルメディアサービス、東京ビデオセンター / NHK BS プレミアム

プロデューサー

松居 径 (NHK)  
茂木 明彦 (NHKグローバルメディアサービス)  
中村 芙美子 (東京ビデオセンター)  
新井 真理子 (フリー)

ディレクター

中江 裕司 (フリー)



情報・バラエティ部門

## 『東京スカイツリー A to Z』

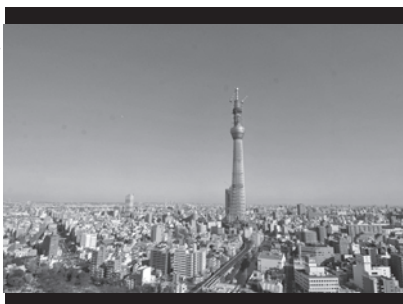
NHK エンタープライズ、テレコムスタッフ / NHK BS プレミアム

プロデューサー

野上 純一 (NHKエンタープライズ)  
松居 径 (NHK)  
堀内 史子 (テレコムスタッフ)

ディレクター

岡村 倫裕 (NHKエンタープライズ)  
佐藤 洋輔 (NHKエンタープライズ)  
小関 竜平 (テレコムスタッフ)  
木下 洋輔 (テレコムスタッフ)



情報・バラエティ部門

## 『よみこの無人島0円生活 土屋アンナ&富永 愛 VS よみこ』

～真夏の無人島 サバイバル対決～

メディア・バスターズ、東通企画 / テレビ朝日

プロデューサー

岩本 浩一 (レスポ)

ディレクター

村上 直行 (メディア・バスターズ)  
寺島 直樹 (メディア・バスターズ)  
数原 涼介 (東通企画)





# 優秀賞

情報・バラエティ部門

## 『戦闘中』

フジクリエイティブコーポレーション／  
フジテレビ

編成企画 高瀬 敦也(フジテレビ)

プロデューサー

鈴木 正人(フジクリエイティブコーポレーション)

笹谷 隆司(フジクリエイティブコーポレーション)

ディレクター

秋永 真吾(トップシーン)

横森 敦(フリー)

山川 泰一(フジクリエイティブコーポレーション)



# 奨励賞

ドラマ部門

## ドキュメンタリードラマ『似顔絵捜査官001号』

クリエイティブ ネクサス／  
NHK BS プレミアム

プロデューサー

松居 径(NHK)

中川 幸美(クリエイティブ ネクサス)

ディレクター

峰添 忠(クリエイティブ ネクサス)



ドラマ部門

## ふたりシリーズ『カウンター』のふたり』

バンエイト／BS12ch TwellV

プロデューサー

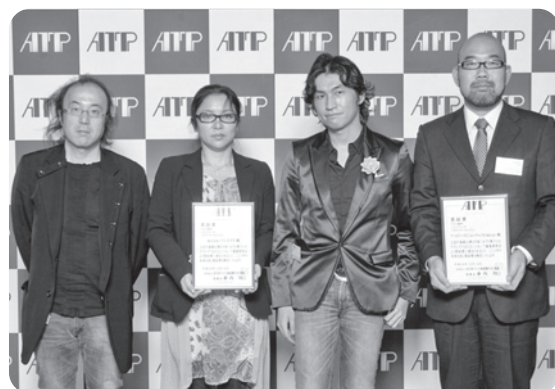
伊賀 宣子(バンエイト)

ディレクター

松木 創(共同テレビジョン)

中島 良(フリー)

千村 利光(フリー)



ドキュメンタリー部門

## ハイビジョン特集『しあわせのカタチ』

～脚本家・木皿泉 創作の"世界"～

NHK エンタープライズ、  
スローハンド／NHK BS プレミアム

プロデューサー

伊豆田 知子(スローハンド)

中山 茂夫(NHKエンタープライズ)

大門 博也(NHK)

ディレクター

茂原 雄二(スローハンド)



# 奨励賞

ドキュメンタリー部門

## 旅のチカラ『馬上人生を過ぐ 俳優・宇津井健』 ～スペイン・アンダルシア～

NHK エンタープライズ、オットィモ、  
ホリプロ / NHK BS プレミアム

プロデューサー

森 博明(NHK)  
川崎 直子(NHKエンタープライズ)  
槇 哲也(ホリプロ)

ディレクター

源 孝志(オットィモ)



ドキュメンタリー部門

## ETV特集『原発事故に立ち向かうコメ農家』

NHK エデュケーショナル、  
桜映画社 / NHK E テレ

プロデューサー

増田 秀樹(NHK)  
宮田 興(NHKエデュケーショナル)  
花崎 哲(桜映画社)

ディレクター

原村 政樹(桜映画社)



ドキュメンタリー部門

## 『三つの名を生きた兵士たち』 ～台湾先住民"高砂族"の20世紀～

テムジン、NHK エデュケーショナル /  
NHK BS プレミアム

プロデューサー

伊藤 純(NHK)  
太田 宏一(NHK)  
戸沢 冬樹(NHKエデュケーショナル)  
矢島 良彰(テムジン)

ディレクター

小柳 ちひろ(テムジン)



情報・バラエティ部門

## ハイビジョン特集『井上ひさしとてんぷくトリオのコント』

フラミンゴ・ビュー・カンパニー、  
NHKエデュケーショナル /  
NHK BS プレミアム

プロデューサー

高瀬 雅之(NHK)  
宮田 興(NHKエデュケーショナル)  
中嶋 弓子(フラミンゴビューカンパニー)

ディレクター

牛山 真一(フラミンゴビューカンパニー)



# 奨励賞

情報・バラエティ部門

## 『世界の秘境で大発見!日本食堂4』

ジッピー・プロダクション/  
テレビ東京

プロデューサー  
水谷 豊(テレビ東京)  
小幡 真万(ジッピー・プロダクション)

ディレクター  
小滝 香一(ジッピー・プロダクション)  
ヨシダ マリ(フリー)  
照井 有(フリー)



情報・バラエティ部門

## ヨルスパ!『蜜室』

～ルックス排除型恋愛ゲーム～

IVS テレビ制作/関西テレビ

プロデューサー  
佐藤 基(IVSテレビ制作)  
小寺 健太(関西テレビ)  
乾 充貴(関西テレビ)

ディレクター  
市川 貴弘(IVSテレビ制作)  
川上 修(IVSテレビ制作)



情報・バラエティ部門

## 『NumerØn』

BIGFACE /フジテレビ

編成企画 高瀬 敦也(フジテレビ)

プロデューサー  
碓氷 陽子(BIGFACE)

演出  
瀬戸 宏章(BIGFACE)



# 特別賞

株式会社WOWOW“ドラマW・連続ドラマW”編成チーム  
次々と話題作を放送し、視聴率、スポンサーに影響されない自由なドラマ編成が、  
志を持つドラマ制作者にとって、貴重なドラマ枠となっている

このたびは特別賞という栄誉ある賞を頂戴し、ありがとうございました。

2003年に「ドラマW」、2008年に「連続ドラマW」をスタートさせましたが、当初は文字通り“ゼロ”からのスタートでした。制作、編成スタッフをはじめ、全社一丸となりこれまで挑戦を続けてまいりましたが、近年こうして多くのWOWOWオリジナルドラマが評価いただけるようになりましたのも、ATP加盟各社様、関係者の皆様のお力添えがあつてのことと思っております。

今回の特別賞を次への糧とし、より一層WOWOWらしい、WOWOWにしかできないドラマ作りへの挑戦を続けてまいります。本当に、ありがとうございました。

編成制作局編成部長 峯崎 順朗(WOWOW)



# 特別賞

## 日本テレビ放送網株式会社 編成局メディアデザインセンター JoinTV & wiz tv 開発チーム

『JoinTV』並びに『wiz tv』の開発で、テレビVSネットから、テレビwithネットのソーシャルテレビ視聴をいち早く可能にした

<JoinTV>や<wiz tv>は新たなテレビの視聴体験の提案です。

番組にスマホで参加でき、チャットで盛り上がり、クイズに答えたりする世界を目指しています。しかし、これらのテクノロジーはまだ未完成で、現在も進化を続けています。クリエイターが使ってくれることにより、角が取れて丸くなり、視聴者に届きやすくなっていくものだと思います。また今回、私たちの冒険にスポットを当てていただいたATPのご高配に敬意を表させていただきます。ありがとうございました。

編成局メディアデザインセンター長 岩井 真介(日本テレビ)



## 株式会社TBSテレビ「サンデーモーニング」制作チーム

放送開始25年目! その偉業に対して

リベラルで骨太の番組作りを25年。そんな理由で特別賞を頂きました。その間ひとりでMCを続けてこられた関口さんの存在の大きさを改めて感じる次第です。ニュースや出来事に真摯に向き合い、絶妙のバランスで伝える。それは、関口さんならではの芸当です。加えて、重厚なパネリストやご意見番、サブキャスター達。稀なことですが、スタジオ部分で視聴率が上がるのは、安心できる空間がそこに広がっているからでしょうか。今後も「あっぱれ」と言ってもらえる番組作りをスタッフ一同続けていくことを誓いつつ…この度は有難うございました。

報道局 プロデューサー 西野 哲史(TBSテレビ)



## 市川 森一

脚本家としての多大な功績、並びにアジアドラマカンファレンスによるアジア文化交流への高い貢献

素晴らしい賞を頂戴しまして感謝申し上げます。

市川は「アジアドラマカンファレンス」には二つの目的があると話しておりました。アジアのドラマを進化させるため皆で議論をし、その結果自国の文化産業に寄与することと、アジアの平和への寄与。いつの日かアジアのあらゆる地域のドラマ制作者が手を携えてひとつのドラマを作り、それを全アジアの人が同じように楽しんで観ている光景を夢見ている。それが実現するのはいつになってもいい。大切なのはその夢を見続けることだと。

市川は今もその夢を見続けていることと思います。

市川 美保子



## こびとづかん

今! “こびとづかん” があらゆるメディアを席卷している

絵本『こびとづかん』(長崎出版)を刊行したのは、2006年の春でした。コピトたちがこんなにも長く、こんなにも広く多くの方々に楽しんで頂けることになるとは想像もしていませんでした。そして、このような大きな賞を頂いたことも、たいへん驚いています。これまでお世話になった方々、支えて下さった多くの仲間たちと、この喜びを分かち合いたいと思っております。私たちは、「こびとづかん」を通し、絵本はもとより多くの価値観、視点を変えていきたいという目標を掲げ活動をしています。今回の素晴らしい賞を受賞したことは、たいへん励みとなりました。謹んでお礼申し上げます。

書籍編集者 中西 洋太郎(なかにし出版事務所)



## 新人賞審査講評

池田 一葵(テレビマンユニオン ディレクター)  
情熱大陸「漫画家・ヤマザキマリ」篇の演出

取材対象者との距離感が親密で、主人公のちょっとした日常がとても良く捉えられていた。いい関係を築きながらの取材だったのではないかと想像した。ディレクターが感じたヤマザキマリさんの情熱がしっかりと描き出されており、伝わってきた。それは同時にディレクターの情熱でもあり、爽やかでパワフルな力を感じた。満場一致で新人賞が決まった。

池山 珠子(テレコムスタッフ ディレクター)  
BS歴史館 復興のカギは民にあり  
「幕末・安政の大地震に立ち向かった男」の演出

とにかく目を惹いたのは画の美しさ。新人とは思えぬセンスに選考にあたった審査員も驚いた。スーパーや取材映像はもちろん、特にアニメーションの美しさが際立っていた。紙芝居形式や再現VTRが多くなりがちな歴史モノの番組の中で、決して視聴者を飽きさせず、池山さん自身が発掘したアニメーターの作品を活かしきっていると思う。今回の「新人賞」をきっかけに、さらなる飛躍をしてもらいたい。

萩原 翔(テレコムスタッフ ディレクター)  
シリーズ東日本大震災 4つの記憶 III  
「聞き書きが紡ぐ想い〜そこに生きる人〜」の演出

番組の中で描かれている主人公の“人と向き合う”姿は、制作者である私たち自身もいつも問うていかななくてはならない事。その基本的なことに立ち返らせてくれた番組だった。「何を言いたかったのか分らなかった」など様々な意見が出たが、新人ディレクターだからこそその熱意と、理屈抜きの番組づくりがそこにはあり、新人賞に値すると思った。何度か登場する、主人公が“電車で向う”シーン。あそこに全てが凝縮されているように感じられ秀逸だった。

枝見 洋子(日テレアックスオン プロデューサー)  
「桐島、部活やめるってよ」のプロデュース

「桐島、部活やめるってよ」の映画化。枝見さんは、入社一年目でこの企画を立ち上げ、原作権の獲得に奔走し、そして監督自ら指名してこの作品をプロデュースした。その行動力と情熱は関わった数多くのスタッフを巻き込み、素晴らしい作品を生み出した。日本映画のプロデューサーとして、今後のご活躍に期待したい。

### 「ATP賞テレビグランプリ2012」新人賞 審査委員

◇浦 弘 二 ディレクター(東京ビデオセンター)	2006年度 ATP賞 新人賞受賞
◇黒田 由布子 ディレクター(テレビマンユニオン)	2007年度 ATP賞 新人賞受賞
◇和田 萌 ディレクター(オルタスジャパン)	2010年度 ATP賞 新人賞受賞

(五十音順、敬称略)

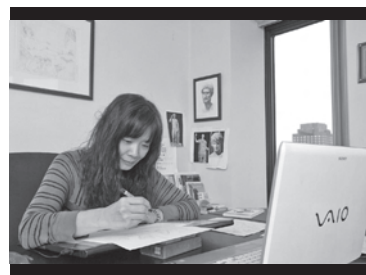
# 新人賞



池田 一葵  
テレビマンユニオン  
ディレクター  
2007年入社

たくさんの幸せな出会いがあったこの番組で、しかも最初に作ったドキュメンタリーで、この賞がもらえたことが本当に幸せです。テレビマンユニオンに入って6年、スタート地点であるこの場所にやっとたどり着くことができました。情熱大陸のプロデューサーのもとへ、毎週のように企画書を出して、出し続けて、やっと決まった大切な大切な作品です。何もかもを惜しみなくさらけだしてくれたヤマザキさんをはじめ、カメラマン、プロデューサーからナレーターさん、音効さんに至るまで、スタッフのみなさんに本当に恵まれっぱなしでした。こんなに愛情を感じることがあるだろうかと思うほど、完成するまで幸せな毎日を過ごしました。記念すべき私の一本目は、何ものにも変えがたい宝物になりました。

ヤマザキマリさんは、どこまでも太く真っ直ぐで強い、カッコいい女性です。彼女の言う「生きているってすばらしい!」という言葉を見つけるためにこの作品を作りました。これからも真っ直ぐ、強い気持ちで作品を作り続けて行きたいと思います。



受賞作:情熱大陸  
「漫画家・ヤマザキマリ」篇



池山 珠子  
テレコムスタッフ  
ディレクター  
2006年入社

「150年前に起きた大震災とその復興から、自分たちの未来を考える」。製作に関わったすべての人が、ただその1点を共有し考え続けた結果が、この番組です。駆け出しディレクターの私に辛抱強く付き合ってくださった出演者・取材者の方々に、驚くほどの力を貸してくれたスタッフの皆さんに、心から感謝します。「ごめんなさい!」の数を少しずつ減らしていきますので、これからもどうぞよろしくお願ひします。

BS歴史館では毎回オープニングで「歴史は過去と現代の対話であるD.H カー」と掲げます。今回の賞をきっかけに、番組に興味をもって見てくれる人が増えれば有難いです。

そして、一緒に未来を作る仲間が増えれば、さらにさらに有難いです。



受賞作:BS歴史館 復興のカギは民にあり  
「幕末・安政の大地震に立ち向かった男」

# 新人賞



**萩原 翔**  
テレコムスタッフ  
ディレクター  
2008年入社

本当に色々な偶然から始まった番組でした。地震のあったその時、僕は取材対象となる女性と同じ映画館で、同じ映画を観ていました。(勿論別々に。)その日をきっかけに、彼女が“聞き書き”を通し被災地と関わろうとしている事を知りました。「ここに生きる個人と向き合わなきゃいけない気がする。」彼女のこの一言がきっかけで取材を始めました。

彼女が長い聞き書きを通して聞いたワカメの養殖家の方の一言が、今でも忘れられません。「我々は、物が流された事が悲しいんじゃない。漁師は昔、遠洋漁業に行って何カ月も家に帰って来なかった。“家族と一緒に生活しながら仕事がしたい。”その思いが、養殖の漁場を作り上げてきた。その“思い”が流された事、それが何より悲しいんだ」と。その人の歴史を丹念に聞く“聞き書き”だから聞けたこの言葉。果して自分のインタビューでこの答えを聞けたかどうかと、今でも思います。聞くという事は、本当に難しい。



受賞作:シリーズ東日本大震災  
4つの記憶 Ⅲ  
「聞き書きが紡ぐ想い〜そこに生きる人〜」



**枝見 洋子**  
日テレアックスオン  
プロデューサー  
2008年入社

このたびは身に余る素敵な賞を頂きありがとうございます。

桐島のラスト、神木隆之介さん演じる映画部の前田の『こうやって映画を作っていると、自分の好きなものに繋がってるって思えることがある』という台詞。脚本作りの時からこの言葉が好きでした。このシーンの撮影時、自分は今、好きなものや憧れていたものと繋がってるどころか、まさにその中にいるのだと胸震えて、ずっとここにいたい、と強く思ったのを覚えています。

桐島を通して、作品をかたちにする事の難しさと、プロデューサーとして私が負うべき責任の重さを学び、チームとなって同じ目標に向かうことの面白さ、そして熱意と誠実さが自分を支える強さになると知りました。

なによりも全てのスタッフ、キャストの方々への感謝でいっぱいです。こんな私まで賞を頂けるなんて桐島の底力はすごいです。

皆様から教えて頂いたことを忘れず、ここからきちんと前へ進んでいけるよう、頂いたこの賞を、のんびりしている自分へのプレッシャーと思い大切にします。本当にありがとうございました。

『戦おうここがオレたちの世界だ。オレたちはこの世界で生きていかなければならないのだから!!』



受賞作:「桐島、部活やめるってよ」

# 観光庁長官賞

ドラマ部門

ハイビジョン特集『にっぽん 微笑みの国の物語』  
～時代を江戸に巻き戻せば～



テレコムスタッフ、  
NHK エデュケーショナル/  
NHK BS プレミアム

プロデューサー  
大伴 直子(テレコムスタッフ)  
伊藤 純(NHK)  
藤田 英世(NHK)  
宮田 興(NHKEデュケーショナル)

ディレクター  
石澤 義典(テレコムスタッフ)



光栄です。ありがたい受賞です。  
テーマは「江戸期の人々の暮らしから学ぶ」でした。  
企画はあの思まわしい震災によりはるか以前に立ち上がって  
いました。周到に準備を進めましたが、原発事故により欧州から  
招いた出演者が来日をしぶるなど、予期せぬ障壁が生まれ  
労作となりました。  
結果から言いますと、それでも東北には江戸の智慧を受け  
つぐ確かな「暮らし」がありました(もちろん東北以外にもあり

ます)。「昨日と同じ今日に感謝し…今日と同じ明日を願う…」  
そんな暮らしです。  
私事ですが自分は東北出身です。番組は、あえて震災の事  
実には触れずに構成しましたが、このような形で響いたことを  
少しだけ誇りに思います。  
プロデューサーとスタッフの全員で難産の末の喜びを分か  
ち合います。ありがとうございました。  
ディレクター 石澤 義典(テレコムスタッフ)

## 総務大臣賞審査講評



ATP賞総務大臣賞は、海外での評価に十分に耐え得る個人的な作品を顕彰するものである。今年のATP賞総務大臣賞の審査では、8作品が最終選考に残った。まず、この8作品について、その内容と審査会での委員による発言の一部を紹介しておこう。

### ◆開拓者たち

テムジンが、満州開拓移民をテーマに制作し、高い評価を受けたドキュメンタリーをベースに、今回はテレビマンユニオンも制作に加わって、満州開拓移民の実像を丁寧に描いた力作のドラマ。質の高いドキュメンタリーを生んだ取材記録が生きて、ドラマもしっかりした作りに仕上がっている。特に東アジア市場でここまで受け入れられるかについては、否定的な意見も多かったが、この種のテーマを取り上げたドラマが欧州のテレビ市場で受け入れられた例もあり、日本でしか作れないテーマということも含め、十分に国際性を含んだ作品。

### ◆3月11日のマーラー

2011年3月11日、東京でのマーラーの演奏会場で東日本大震災に遭遇した人々のそれぞれの姿を、丁寧に追いかけることで、震災と向き合うとはどういうことだったのかを的確に描き出した作品。企画の着眼点の斬新さは高く評価されるべき。被災地の映像を使わないで、「3月11日」を考えさせたところも、注目される。

### ◆明日をあきらめない…がれきの中の新聞社◆

～河北新報のいちばん長い日～

東日本大震災によって社屋も、記者たちも被災しつつも、新聞を作り続けた新聞社の物語。あえてヒーローを立てないで、震災に向き合った人々の姿をしっかりと描いている。新聞記者を少々美しく描きすぎているところが気になるなど、ドラマとしての完成度は決して高いとは言いがたいが、海外市場では、受け入れられやすい作品。

### ◆ETV特集 坂本龍一フォレストシンフォニー森の生命の交響曲

坂本龍一が30歳代から構想していたという「フォレストシンフォニー（森の音楽）」に挑む姿をドキュメンタリー化した作品。画像は美しく、子どもたちとのワークショップも面白い。ただ、製作者が、坂本龍一にひたすら寄り添うことで作られており、両者の格闘が感じられないのが残念。

## ATP賞テレビグランプリ2012 総務大臣賞 審査委員長 音 好 宏 (上智大学新聞学科 教授)

### ◆極上美の饗宴 シリーズ琳派

華麗なる革命究極の躍動美

～依屋宗達 鶴下絵和歌巻～

江戸時代に活躍した琳派の魅力を、解き明かしていくユニークな美術シリーズのうち、依屋宗達にフォーカスした1本。単なる美術解説番組ではないところが魅力であり、評価したい。ただ、琳派の科学性など、隠れた部分をもっと描くべきで、新たな発見の部分が弱い。

### ◆ドキュメンタリードラマ 似顔絵捜査官001号

日本の警察での似顔絵捜査の打ち明け話をドラマ化。ストーリー自体は面白いが、主人公に都合のよい構成に終始しており、その分、逆にこの成功物語の危うさも感じてしまう。人物構成をもっと立体的にした方がより深みのある物語になったという声も。

### ◆ザ・ノンフィクション 特別版 まりあのニューヨーク

～死ぬまでに逢いたい人～

難病のALS(筋萎縮性側索硬化症)と闘いながら、自らのライフスタイルにこだわり、元夫に別れを告げにニューヨークで渡航するフランキ・マリア・さわのさんの最期に、カメラが密着したドキュメンタリー。魅力的な主人公であるが、構成が冗長であり、もう少し刈り込んだ方がよかった。「難病もの」は、国際マーケットでは激戦であることを考えると、広がり弱いところが残念。

### ◆東京スカイツリー A to Z

スカイツリーがオープンするにあたって、その魅力をAからZの頭文字に整理、紹介した番組。スカイツリーの隠れた魅力を引き出し、紹介しようとした努力は買うが、スカイツリーの紹介モノに終始しており、そのCM臭が強いところが鼻につく。「日本は素晴らしい」という押しつけのメッセージと読み取られかねないドメスティックな作品との厳しい声も。

以上、最終選考に残った8作品の審査において、論議の末、最終的に今年の総務大臣賞には『開拓者たち』を、総務大臣特別賞には『3月11日のマーラー』選んだ。

## 「ATP賞テレビグランプリ2012」総務大臣賞 審査委員

(五十音順、敬称略)

◆審査委員長 音 好 宏(上智大学新聞学科 教授)

◇審査委員 天城 靱 彦(NHKエンタープライズ国際事業センター 経営主幹) 隈 元 信 一(朝日新聞 東京本社編集委員)

佐 藤 一 彦(立教大学現代心理学科 教授) 鈴木 嘉 一(元読売新聞編集委員 ジャーナリスト)

# 総務大臣賞

## 『開拓者たち』



テムジン、テレビマンユニオン、  
NHKエンタープライズ/  
NHK BS プレミアム

プロデューサー  
松居 径(NHK)  
北川 恵(NHKエンタープライズ)  
矢島 良彰(テムジン)  
杉田 浩光(テレビマンユニオン)

ディレクター  
岸 善幸(テレビマンユニオン)  
中村 豊(テムジン)

この番組は、戦前旧満州(中国東北地方)に渡り、過酷な逃避行と避難生活の果てに帰国、戦後の日本で山林原野を畑や牧場に切り拓いた人々の物語です。2012年元旦からNHK BSプレミアム(全4回)にて、4月から総合テレビで新たな素材を加えた再編集版(全6回)が放送され、DVD化もされました。反響も大きく、戦争体験者はもちろん、若い人たちからもたくさんの声が寄せられました。満島ひかりさんや新井浩文さんをはじめとする若い俳優たちが過酷な時代に向き合い、真剣に役を生きてくれた成果だと思います。

ドラマは、テムジン中村豊ディレクターが丹念な取材によって生み出したドキュメンタリー番組『地獄を見たから生きてこられた』『留用された日本人』『認罪』『取り残された民衆』などを



ベースに、栃木県那須高原に実在する千振地区開拓者のエピソードを重ね合わせて脚本化したものです。ロケ地は北海道帯広、中国天津、そして戦後開拓の苦闘の現場那須千振。夏の猛暑の千振ロケでは、開拓者たちとその家族から、農業指導にはじまり、ケータリングの食材提供、消えモノ(料理)づくり、撮影中の車止め、そして出演まで、惜しめないご協力をいただきました。千振の皆さんなくしてこの番組は完成しなかったと思います。何よりも若い俳優たちのそばに本物の開拓者たちがいてくれたことが、ドラマに大きな力を与えてくれました。今はただただ感謝するばかりです。本当にありがとうございました。

演出 岸 善幸(テレビマンユニオン)

# 総務大臣特別賞

## 『3月11日のマーラー』



NHK エンタープライズ/  
NHK 総合

プロデューサー  
寺園 慎一(NHKエンタープライズ)  
長野 真一(NHK)

ディレクター  
飯塚 純子(NHKエンタープライズ)

こんなシンプルな番組に注目していただき、とてもうれしく思います。この番組は、結果として、震災の映像がワンカットも出てこない震災の番組です。3月11日の震災当日の夜、世界的な指揮者ダニエル・ハーディングと新日本フィルが、すみだトリフォニーで、わずかな観客の前でコンサートを行ったという新聞記事に目を留めたことが、番組のきっかけでした。その演奏会が伝説的な名演となったと、その後聞きました。

震災の夜、東京にいる私たちも、底知れない地震への恐怖、家にどうやって帰るかという不安、被災地への祈りなど、さまざまな感情が交錯していました。そして、もうひとつ東京の人には共通の感情があったと思います。それは「こんなに多くの命が失われているにも関わらず、普段よりは少し不便だけどそれまで通りに暮らしていることへの罪悪感ではなかったかと思



うのです。

この番組は、そんな東京で暮らしている私たちの居心地の悪さが出発点でした。震災の夜に演奏会場に居合わせた指揮者、演奏家、そして観客の方々は、私の予想をはるかに超える豊かな言葉で、あの夜の経験と想いを語ってくれました。みなが、「こんなときに演奏している自分」「こんなときにマーラーを聴いている自分」に罪悪感や無力感を覚えていました。それでも、やれることはこれしかない、そんな感情が奇跡的な名演につながりました。

あの日、誰もが感じた悲しみや不安、被災地への祈り、そしてその後の無力感を、番組を見てくださった方々と共有できたのだと思っています。

ディレクター 飯塚 純子(NHKエンタープライズ)